令和５年度　附属世田谷小学校　学校経営計画

1. 附属学校の役割
   - ○　学部・大学院における研究を附属学校で実際の指導に取り入れ、その結果を学部・大学院の教育研究に反映していく実験・実証校としての役割
   - ○　学部・大学院の教育研究に基づいて、教育実習生を指導する教育実習校としての役割
   - ○　一般公立学校と同様に普通教育を行う公教育の役割
   - ○　地域の学校と連携して教育・研究を推し進める役割

2. 東京学芸大学附属学校の教育目標

   東京学芸大学附属学校は、在学する幼児・児童・生徒に普通教育を施すとともに、大学と連携して実証的研究や実践的研究に取り組むことにより、
   - ○　協働して課題を解決する力
   - ○　多様性を尊重する力
   - ○　自己を振り返り、自己を表現する力
   - ○　新しい社会を創造する力

   の四つの力を持った次世代の子どもを育成する教育を推進する。

3. 附属世田谷小学校の教育目標

   「子どもが、人やもの、こととの豊かなかかわりを通して、自律性と共存性を高め、相互啓発的な生き方を追求していけるようにする」

4. 育てたい児童像

   「思いゆたかに　考えふかく　ともに生きる子」

   ・充実した思考力…広い視野に立ち、合理的、創造的に考える子。

   ・練磨した感受性…人間や自然を深愛し、情操の豊かな子。

   ・自覚的な社会連帯性…自他を尊重し、協力して社会を高めていく子。

   ・徹底した実践力…心身ともに健全で最後まで頑張りぬく子。

5. 中期経営目標
   - ○　先端的教育の実証的研究を行う

   ・これまで培ってきた「相互啓発的な学び」をベースとした次世代の学校教育の形を提案する。
   - ○　地域の拠点校として現職研修及び情報発信を行う

   ・これまでの研究成果を生かして、地域などへの研修支援・発信機能を構築する。

6.　年度経営目標

(1)学校運営の目標:

◎子どもが安心して集える学校を目指して組織的に活動する。特に児童の言動や人間関係を日常的に観察して、よりよく整えられるように努める。また教員は、互いに尊重し合い、協働的に仕事に取り組むよう努める。

［教員同士の関係］

〇互いに、仲間の力が十分発揮できるように配慮したい

・相手の思いを受け止めて温かく

・仕事の役割分担をしたとしても、任せたきり関知しないとか、批判だけはする、ということにならない様に、遂行している仕事を理解して協力姿勢を示すことは大切（ダメ出しより励まし）

・相手の言動を否定したように受け取られる言い方には気をつける（そのつもりがなくても）

・親密な関係の中で「茶化す」ようなことも多くあるようだが、茶化しと本気の違いが伝わらない場合も多くあるので注意が必要（茶化しをしないで、という意味ではなく）

〇他者が「できていない」「やっていない」と感じられることがあっても、受け止め・許すように心がけたい。一方で休むときなどに、わけを明確にしておくなどの配慮も必要。

〇話し合いは 一つのものにまとめ上がるような方向を目指したい。

・思ったことを何でも発言するのでなく、話がまとまる方向に役立つ様に発言を選ぶことが大切。

・話が過度に拡散する方向にしないよう、意見・異論は資料の事前配布の段階で述べて、預ける。

［仕事の優先度の判断について］

昨夏にも伝えたことの再掲です。ご理解ください。

先生たち(家族)の健康＞児童の安全・健康＞教育の展開(学習、児童の人格育成、学校行事、保護者の理解得る）＞先生たちの仲＞実習指導＞研究＞近隣との関係＞社会貢献

(2) 教育活動の目標

◎ 児童の育成について

［おりに触れてその都度の丹念な指導］

〇児童が落ち着いて過ごせることを意識して

「思い豊かに考え深くともに生きる子」を目標に、他者との適切な人間関係を持てて、自分のすべきことができて、周りのことも酌み取れて、を目指したい。

・ベースとして、

「おとなしくしていることができる」

「自分の行動や気持ちをコントロールできる」

「人の言うことを聞いてそれに添うことができる」ができていて欲しいし、

子どもをそういう状態に整えながら、

「子どもが自由にのびのび取り組み・学ぶ」

「自分の意図でデザインしていくように仕向ける」

「互いに思いや考えを伝え合って理解しあう・協力し合う」ができる様に育てていくと考えたい。
具体的には、
「じっとしていられない」
「黙っていられない」
「自分勝手に行動する」
「興味あることに偏り・限りがある」
「自分のコントロールができない(生活面・感情面)」
ような場面が見られたら、その都度、丹念に諭し導いていく必要がある。

・自由に子ども任せで過ごすことで自然と学んで目標の姿に近づいていく、時代ではなくなった感。
身の回りのことなどすべきことや自分の義務を果たさずに、気ままにしているのも、方向が違う。
これまでもそれを気にして指導頂いたと思うが、引き続き(よりいっそう)この点を留意していきたい

・R4の先生方の取り組みで「落ち着いていられる」かなりできてきたという実績がある
→　であれば、次は、廊下・階段も、通学路も。
廊下・階段で、大声で叫ぶ、奇声を発する、走るはよくなくて、「静々といく」のがよいと教えたい。
(教室でも。仲間に言いたいことがある時に、大声で叫ぶのではなくて、そばまで行って静かに話す。)
(下校時の門の近くでも。‥‥その後の通学路でも同様ではないか。)

○「叱る」「指導する」の再考
・自由にさせておいて、うそ・裏切りなどの失敗や喧嘩や悪さがあったときには呼んで指導する・叱る、というやり方は、あまり適切ではない可能性あり。
叱られれば自分で考えて学んでいく時代ではなくなった。
・指導される・叱られることにより、指導する人から逃げること隠すことを覚えるに繋がりやすい。
また、怒らない人や怖くない人には失礼な態度をとる者が出る可能性がある。
・何度も情報を伝えて失敗のたびに直して、覚えるまで繰り返す･･･本当にそれでいいかは検討を続ける
・家庭での保護者の接し方も点検する必要性あり。

○「ハラスメントのない教育環境を」という國分学長の意向も踏まえて変えていきたい。
特に、児童が不適切なことをしたからといって、怒鳴ったり力任せに引っ張ったり威圧したりして指導する、という方法は、令和のいま、とらないほうがいいやりかただと考える。
細かかったりくどいようであっても、その都度、望ましい行動を温厚に説いて諭して、子ども自らが適切な行動を選択できるようにする。「叱られてやめる」のではなくて。
子どもに聞いてもらえる関係でいることも大切。

○また、別の観点から、発達・認知の面で心配のある児童には、止め方や伝え方などその特性に合わせて子ども目線で接する・対応する必要がある。
ただ単に、叱る・指導する、命じる、言い含める、約束する、だけでは改善できない場合あり。
特に、クラスに５～６人いるグレーゾーンの子。
つい、言えば通じるように思ってしまうが、そうではないことも多いので工夫が必要。

○人の気持ちを感じる練習は大切（皆が心地よくいるためにも）

特にHOMEで、だらしない子、自己コントロールができない子、自己主張ができない子、などがいることがあるが、その子に対してネガティブな思いを持ったり意地悪な対応をしたり、暴言・暴力があったり、ということが往々にして起こります。

そういう例が見られたときには、どんな人をも受け入れる、ともに過ごせる、ということに慣れていってもらうための言葉がけ・意識づけが、その都度なされないといけません。

○対他者の行動について（文科省からのメッセージ）

「子どもの自殺500名／年間」→「人の痛みがわかる様な子どもに」との文科からのメッセージ。

「された方の気持ちはどうなんだ？」の意識、を持てることが必要。相手目線(あなたの目線)。

↓

「人より上」になりたい・ならせたい価値観の中で育ってきた子どもが多い現実も踏まえた方向修正。

○「勝ち負けを競わない」のではなくて

「勝ち負けを競わない」のは難しい。なぜなら競争が好きだから。

競争する・競うというのは、勝った結果を得ること(負けた者より上と位置づけること)ではない。

勝ちを目指して挑む過程が面白い、そこが「競う」。

↓

勝負がついた後の、勝った側・負けた側それぞれの振る舞い方を学ばせることの方が大切。

負けた人を下に見る、ばかにする、勝ちをひけらかす、勝つために人の足を引っ張る、負けて投げやりになる・潰れる、仕返しする、悪口を言う、人のせいにする、ではなくて、

また挑もう・競おうと励まし合うこと、立ち上がること、敗者をも認めること、勝者を称えること、ノーサイドの気持ち、などを持てることが大切。（ドッジボールや走る競争もゲームも百人一首も）

(3)研究活動の目標

◎文部科学省研究開発学校の指定を受けた、『「学びを自分でデザインする子ども」を育む教育課程の創造』の最終年度のまとめ・発表について、学校として取り組む。

○教科担任制と Home、Laboratory で実施する教育の課題と成果について、実践に即して知見をまとめ、公表できるように努める。

(4)学生の教育・支援活動の目標

○教科担任制と Home 制のもとで受け入れている教育実習において、学生にとってのよりよい学びが得られるような、実習のあり方を探るとともに、次年度以降に向けた提案ができるように努める。

(5)社会的貢献活動の目標

○授業研究の指導、地域・企業との連携、教育・研究成果の執筆、啓蒙的活動、などについて、要請を受けた個々の活動として行う。